

(様式1)

令和4年度 学校評価結果報告書(中学校用)

(1) 学校教育目標	6年間を見通した計画的・継続的な指導を通して、真の国際人として未来社会の進展に貢献できる人材を育てる。
(2) 現状と課題	現状：県内唯一の県立中高一貫校として、中高一貫校ならではの特色ある教育活動の実践を継続している。 課題：生徒指導上の問題（不登校、インターネット・携帯電話に関わる問題等）への対応や、教育課程編成に伴い、中高ともに人員・時間・場所（教室）等の物理的な課題に苦慮している。
(3) 重点目標	1 併設型中高一貫教育校の特色を活かす系統的な教育活動の展開 2 心身共に健全で豊かな心を持つ生徒の育成 3 確かな学力を育む教育の充実と生徒の適性に応じた進路実現 4 理数教育及び語学教育の充実と探究型学習の推進 5 開かれた学校づくりの推進 6 快適な職場環境の醸成
(4) 結果の公表	三本木高等学校と同様に、各学年の「学年だより」や「学年懇談会」で説明している。 またホームページにおいても広く公開している。

学 校 名	青森県立三本木高等学校附属中学校
自己評価実施日	令和5年2月10日(木)
学校関係者評価実施日	令和5年2月21日(火)
(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成	
地域の多彩な有識者で構成される学校評議員会を学校関係者評価委員会として位置付けている。 学校評議員5名 (地域企業代表1名、大学関係者1名、保護者代表1名、後援会代表1名、学校協力者1名)	

自 己 評 価					学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	①高校と附属中学校間、学年や分掌及び教科間の連携の強化 ②中高6年間を見通した教育計画及び教育活動の再構築と充実	①附属中学校での先取り学習(数学・英語)をはじめとする中高6年間を見通した教育課程を実施する。中高教員の授業への相互乗り入れを継続する。 ②必要に応じて中高合同行事(進路講演会、交通安全教室等)を実施する。 ③部活動の連携を深め、中体連終了後に円滑に高校の部活動に移行できるように継続して取り組む。 ④中3生が、高校と合同で東京大学のオープンキャンパスへの参加。	①附属中学校での先取り学習(数学・英語)を初めとする中高6年間を見通した教育課程を継続して実施できた。中高教員の授業への相互乗り入れを継続できた。 ②中高合同行事は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインを活用するなど一部開催方法を変更して実施した。 ③部活動の連携を深め、中体連終了後に円滑に高校の部活動に移行できるように継続して取り組むことができた。 ④新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。	A	・中高一貫教育のメリットを最大限活かしてほしい。 ・中高間の交流を作る機会を増やしてほしい。 ・中高一貫校のメリットである職員の相互連携をより強固なものにすることはもちろんだが、中・高異学年の交流も取り組んでほしい。それにより、下級生は上級生を敬い、上級生は下級生を思いやる。精神的・社会的成長が期待できる。	次年度、新型コロナウイルス感染症が「2類」から「5類」に変更される見通しとなったため、従来通りの実施方法に戻すとともに、より効果的な内容や方法を工夫した教育実践を計画する。 今後も、中高一貫教育課程委員会を核として、学期ごとの見直しを図りながら、中高6年間の教育活動を改善していく必要がある。
2	①自らを律し、他を尊重する、品格ある行動様式を備えた生徒の育成 ②文武両道を実現する部活動 ③特別な配慮の必要な生徒への教育相談委員会等による支援体制の構築	①中学校単独開催の運動会、三高祭、合唱コンクールを通して、生徒の自治的な取組と生徒会活動の活性化を図る。 ②令和元年度から部活動の任意加入制とした。また、部活動の精選を進める。 ③定期的に教育相談委員会(年9回)、企画会議(月1回)、学年会議、生徒指導会議(隔週)を実施し、学級担任等が一人で抱え込まないように、組織的に対応する。 ④学校生活アンケート(年5回)、アセス《学校環境適応感尺度》(年3回)を実施し、生徒本人の主観的な適応感を包括的かつ多面的に判断し、教育相談に生かす。また、データを高校と共有することにより、生徒情報を進学後の生徒指導に生かす。	①運動会は、内容及び時間を短縮しての実施。三高祭は1日日程で実施、合唱コンクールは無観客で市文化センターで実施することができた。昨年度よりは一部制限を解除しての実施となり、生徒の達成感を得られるものとなった。 ②部活動の精選は今後も継続していく。 ③定期的に教育相談委員会(年5回)を実施し、学級担任等が一人で抱え込まないように、組織的に対応した。 ④学校生活アンケート(年5回)、アセス《学校環境適応感尺度》(年3回)を実施し、生徒本人の主観的な適応感を包括的かつ多面的に判断し、教育相談に生かすことができた。また、データを高校と共有することにより、生徒情報を進学後の生徒指導に生かしていく。	A	・コロナ前の状態に戻して、一般的な中学校生活を送ってほしい。 ・活動の資本は健康にあります。一生を通じた体づくりの習慣を学生のうちに身に付けてほしい。	各行事については、これまでの制限を一部解除した形での実施に終わってしまった。 今後は、より教育効果を高めるため、細部にわたる改善を積み重ねていく必要がある。
3	①学習意欲を高める授業改善と家庭学習の充実 ②自己の将来とのつながりを見据えたキャリア教育の充実 ③諸学力テストの実施	①校内研修を充実させ、全ての教科で「主体的対話的な深い学び」のための授業実践に努める。 ②中高一貫教育課程委員会による、6年間のキャリア教育プログラムを再構築するために、中学校3年間のキャリア教育プログラムの見直しを行う。 ③諸学力テストの見直しを行う。 全国学力・学習状況調査(文部科学省)3年生、青森県学習状況調査(県教委)2年生、学力推移調査(ベネッセ)全学年、駿台中学生テスト(駿台 全国版)3学年希望者、学力診断問題(正進社 県版)全学年	①外部から助言者を招き、「指導と評価の一体化」のための校内研修を計画的に実施し、教職員それぞれの授業改善につなげることができた。 ②中学校3年間のキャリア教育プログラムを再編成し実施した。今後、6年間のキャリア教育プログラムを再構築する。 ③諸学力テストを計画的に実施した。全国学力・学習状況調査(文部科学省)3年生、青森県学習状況調査(県教委)2年生、学力推移調査(ベネッセ)全学年、駿台中学生テスト(駿台 全国版)3学年希望者、学力診断問題(正進社 県版)全学年	B	・生徒の学力や意欲は様々で、細やかに対応するのは難しいと思うが、中学校の段階で諦めてしまうことがないように努めてほしい。 ・ただ単なる詰め込み型教育だと勉強に意義を見いだせない生徒は、どんどん遅れていくと思う。どんな人間になりたいか、職業観を育み、それが学習意欲の基盤となる。職業観・勤労観を育むための学習プログラムを取り入れてはどうか。	コロナ禍のため、キャリア教育に関わる実践について、学年単位でしか実施できなかった。 本校で生徒に身に付けさせたい基礎的汎用的能力を明確にしながら、キャリア教育の充実にも努め、生徒の学習意欲を一層高めていく必要がある。
4	①SSH事業で培われた理数教育のノウハウを継承し、課題解決型の授業を展開 ②外部専門機関と連携した英語指導力向上事業を積極的に活用 ③中高一貫教育の中にGSC(グローバルコース)及び語学教育の運営体制を構築	①「中高一貫教育課程委員会による運営体制の再構築」や「授業改善」の他に、数学、英語では中3時の先取り学習(高校教諭による)、年間標準授業時数を超えた授業時間数の確保、中高協働探究セミナーの実施、高校のGSCの発表会等への参加などを実施する。 ②大学受験を見据えて英検の他、令和3年度からは数検も実施し上位級取得を目指す。	①GSC事務局と協力しながら、数学・英語での先取り学習、高校教員による探究的な学習(総合的な学習の時間)、中高協働探究セミナー、グローバルサイエンスコースの課題研究発表会への参加などを行った。 ②英語検定では、準1級1名合格をはじめ、2級、準2級合格者を多数出すことができた。また、準1級合格に挑戦する生徒も支援できた。	B	・探究活動をぜひ一層推進してほしい。生徒の発表を拝聴し、感動した。 ・英語・数学もさることながら、国語(作文や言葉での説明)教育も大事にしてほしい。	ICT(タブレットPC等)を適切に活用しながら「指導と評価の一体化」の視点で授業改善に努めたが、一方で、学習面において配慮の必要な生徒が見られるようになった。今後は個に応じた指導を進めていく必要がある。
5	①小学校への訪問活動を継続 ②本校ホームページへの定期的な情報公開	①校長、教頭での小学校に訪問を継続する。 ②小学校担当職員を決め、小学校との情報交換を行う。 ③本校HPに、定期的に情報を公開する。	①教頭が小学校訪問を継続して実施した。 ②小学校担当職員を決め、小学校との情報交換を密にした。 ③本校HPに、定期的に情報を公開した。	B	・入学志願者が増えるようにネットを活用し、魅力的な情報発信をしてほしい。 ・広報活動を引き続き行ってほしい。	学校説明会や小学校での説明会について、今年度もコロナ禍前の形での実施はできなかった。また、行事そのものが縮小や制限しての実施となったため、本校HPへの掲載機会が少なく、本校の情報を従来通り発信することが困難であった。次年度、新型コロナウイルス感染症が「2類」から「5類」に変更される見通しとなったため、従来通りの実施や方法に戻すとともに、より効果的な内容や方法を計画する。
6	①教職公務員としての服務規律の確保 ②教職員間のコミュニケーションによる相互理解 ③心身の健康を維持・増進と多忙化解消	①教職員の服務規律の確保の徹底について、研修資料をもとに全職員で定期的に確認する。 ②教職員間の日常的な情報交換を密にし共有する。 ③ワークライフバランスを確保できるよう、業務の効率化を図る。	①職員朝会や職員会議等で、管理職から情報を提供し、服務規律の確保の徹底について職員全体で何度も確認した。 ②些細なことでも職員同士で情報を共有し、組織的に対応した。 ③前年度の踏襲を見直し、業務の効率化を図った。	B	・世の中は、働き方改革の流れの中にあり、効率化は大いに賛成だが、まだ精神的にも未発達な生徒ゆえ、対話はつづけてほしい。 ・難しい年代の生徒を相手にしているので、悩みなどはしっかりと共有して、気軽に対応してほしい。	踏襲型の業務を見直し、改善を図りながら教育活動にあたっていく必要がある。 服務規律については、教職員の不祥事が生じるたびに、職員会議等で注意喚起を行うとともに、校内研修などでも扱い、職員の意識の高揚を図る。

(11) 総括	今年度もコロナ禍で制約の多い1年ではあったが、内容や方法を工夫しながら教育実践を積み重ねてきた。次年度は、できる限り従来通りの教育活動に戻すことで、より充実した教育活動が展開できるよう、それぞれの目的や生徒に身に付けさせたい力を明確にしながら取り組んでいきたい。
---------	---